

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520921

研究課題名(和文) 東日本大震災以後の在日フィリピン人カトリック共同体のネットワーク化の研究

研究課題名(英文) A Study of Networking among Filipino Catholic Communities in the Tohoku Devastated Area

研究代表者

寺田 勇文 (TERADA, TAKEFUMI)

上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：20150550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災の被災地では、震災後、ローマ・カトリック教会仙台教区の方針で可能な限り全教会に司祭が常駐するように配慮され、フィリピン人などの外国籍信徒を教会に迎え入れるようになった。調査対象の岩手県A教会にはフィリピン人司祭が配置され、震災前110人だった信徒が震災1年後に190名に増加したが、そのうちの成人はすべてフィリピン国籍の女性、子どもたちの大多数は日本人とフィリピン人を両親にもつ子どもたちである。被災地各地のフィリピン人信徒はそれぞれの地域の教会を基盤としてグループをつくり、相互にネットワーク化することを通して、日本人中心だった各教会の活動に参加、被災からの回復をめざしている。

研究成果の概要(英文)：The Roman Catholic Diocese of Sendai decided to post priests to all the parish churches after the March 11 Earthquake. The diocese also tried to accept non-Japanese Catholics to their church communities. Since Filipinos are the largest non-Japanese Catholic population in the Tohoku area, the church-going population increased. A church in Iwate Prefecture, where I conducted intensive long-term fieldwork, saw a significant growth of members from 110 (before the March 11 Earthquake) to 190 (one year after March 11). Within this population, a majority consisted of Filipino women married to Japanese men, and their children. Filipinos in Tohoku organized themselves into groups through networking activities with the churches, and actively participate in the church activities formerly dominated by the Japanese members. Such Filipino communities became one step towards rebuilding their lives after the disaster.

研究分野：文化人類学

キーワード：東北大震災 キリスト教 フィリピン人 移民 宗教

1. 研究開始当初の背景

2011年3月11日の東日本大震災と福島原発事故直後に、東北被災地から東京に約150人のフィリピン人とその家族が避難してきた。在東京フィリピン大使館が被災地に差し向けた救援バスで東京に移動し、フィリピンへの一時帰国を希望した人たちである。フィリピン大使館はカトリック東京国際センター(CTIC)に連絡し、都内のいくつかの教会に一時避難所が開設された。4月以後、CTICはカトリック仙台教区と相談の上、被災地の教会、とくにフィリピン国籍の人々が多い地域(仙台市内、大船渡、気仙沼、福島市内など)の教会にフィリピン人神父、フィリピン人シスター、カウンセラーなどを派遣し、英語もしくはタガログ語のミサを行い、また、震災後に必要とされていた各種のカウンセリング活動を展開した。

東北で被災地となった青森、岩手、宮城、福島の4県はカトリック仙台教区の管轄範囲と合致している。これらの地域で生活するフィリピン人の大多数は女性で、その多くが日本人と結婚して、家族を持っている。仙台を除いてそうしたフィリピン人女性たちは震災前には、定期的にそれぞれの地域のカトリック教会に姿を見せることはなかった。ほとんどの教会ではミサは日本語のみで行われており、英語ミサがある教会はわずかであり、仙台教区にはフィリピン人の神父もシスターも配置されていなかった。

しかし、震災以後、東京などからフィリピン人司祭が時折、仙台教区の教会を訪れて、英語またはタガログ語ミサを行い、それぞれの地域では、フィリピン人居住者が教会を中心に集まるようになった。岩手県のある教会では、震災以前には同教会に常駐する神父はおらず、近隣の複数の教会に日本人神父が1人配置されているだけだった。震災後、仙台教区はできるだけすべての教会に神父を配置するという方針を定め、この教会には関西の修道会から日本人神父が派遣された。この神父は同地域に50人~100人近いフィリピン人女性が日本人と結婚して生活していることを知り、つてをたどり、あるいは当時、市内各地の小中学校などに設置されていた一時避難所を訪問し、必要な支援について相談するなどの活動を繰り返した。

震災から2ヶ月経った2011年5月になると、こうしたフィリピン人のうちの数人が教会に姿を見せ、タガログ語(フィリピン語)のミサを希望したため、東京のCTICがフィリピン人神父を派遣して、5月中旬にこの地域で初めてのタガログ語ミサが実現した。

同じく2011年の9月末にはフィリピンのアキノ大統領が宮城県石巻教会を訪問し、同幼稚園に東北各地から集まった200名をこえ

る在日フィリピン人と面会し、激励した。同年6月にはフィリピン政府は2週間、岩手県、宮城県に医療チームを派遣、外務省の協力を得て、被災地のフィリピン人のケアにあたっている。また、カトリック教会は2011年10月には、広島と東京からフィリピン人およびインドネシア人(タガログ語にも堪能)の2人の神父を岩手県に派遣し、被災地の外国籍信徒のケアを担当させた。

震災後のこうした新たな状況のなかで、それまでフィリピン人であること、カトリックであることを積極的に表明することなく、東北地方、とくに太平洋沿岸地域で暮らしてきたフィリピン人の間に、さらには東京教区など東北以外のフィリピン人共同体との間に、教会を介した在日フィリピン人のネットワークが形成されつつあった。

2. 研究の目的

東日本大震災後、被災地のフィリピン人の間でカトリック教会を中心にフィリピン人共同体を形成する動きが各地で見られるようになった。首都圏のカトリック教会のフィリピン人が被災地のフィリピン人を支援した結果、被災地のフィリピン人の間ではカトリックであること、フィリピン人であることが意識、確認、再定義されるようになった。彼らは被災地で、東北内で、さらには全国のフィリピン人共同体とつながり、ネットワーク化が進められつつある。

本研究は、こうした動きを、被災地における複数のカトリック教会における活動を中心に観察し、関係者のインタビューにより、ネットワーク化の背景、内容を把握し、それにより東北被災地の在日フィリピン人社会のありようを考察する。

3. 研究の方法

東北被災地のカトリック教会を訪問し、英語またはタガログ語のミサ、形成されつつあるフィリピン人共同体の各種の活動を観察、記録することを出発点とする。

つぎにいくつかの教会の担当司祭、日本人信徒、フィリピン人信徒、さらに教区関係者などを中心にライフヒストリーを含むインタビューを実施する。

最終年度には関係者を招いて公開シンポジウムを開催し、問題点を整理する。

4. 研究成果

(1) 岩手県A教会の事例

本研究は震災後1年を経た2012年4月に開始したが、その時点で少なくとも仙台市内

の教会以外に、岩手県南部のA教会、宮城県北部のB教会には、それぞれフィリピン人信徒が多数集まり、教会を中心とした共同体が形成され始めていた。

A教会を例にとると、そこでは震災直後の2011年5月に首都圏から派遣されたフィリピン人神父によるミサが行われており、80人近くのフィリピン人が出席した。かれらはこの地域にすでに10数年あるいは20年以上暮らしている女性たちであるが、その多くはそれまで一度も近隣の教会に来たことがなかった。場合によっては来日後、一度もミサに出席したことがない者もあり、2011年5月のミサのなかでタガログ語聖歌が歌われても、咄嗟にはことばが出てこないという人たちも少なくなかった。

しかし、その半年後にはフィリピン人とインドネシア人神父により、A教会近くに仙台教区滞日外国人支援センターが開設されたため、月に一度は英語またはタガログ語のミサに出席できるようになった。2011年秋からは、毎日曜日午前の日本語のミサでも、フィリピン人信徒が出席している場合は、日本語で主の祈りを唱えたあとに、日本人信徒を含む全員がタガログ語で同じく主の祈りを歌うようになった。宗教とくに典礼においては言語の問題はきわめて重要である。ミサの言語、聖歌を何語で歌うのか、何語で祈るかという問題は常に存在する。フィリピン人信徒の存在を意識し、同一の教会共同体としてミサを共にしたいという意向が、こうしたタガログ語の主の祈りの採用という形で表現されている。

当初集まったフィリピン人女性のなかから共同体を創ろうという機運が生まれ、A教会および担当司祭と連絡をとりながら、活動が開始された。月に一度の英語またはタガログ語ミサへの呼びかけ、2つの地域にわかれて毎週土曜日にブロック・ロサリオを開始した。ブロック・ロサリオは特定の地域(ブロック)内で、信徒が集まり、主として個人の家に聖母像をおいて、皆でロサリオの祈りを捧げるカトリック教会の信心業である。日本ではほとんどみられないが、フィリピンでは各地で行われているもので、この地域のフィリピン人共同体の重要な活動の一部として導入された。

震災直後から被災地のカトリック教会には、日本国内各地、さらには海外から多種多様な支援が寄せられており、A教会も例外ではなかった。震災後しばらく経った段階で、このグループの代表者たちが東京、関西、九州など各地の教会に招聘され、被災経験を共有し、支援に対する感謝を表明する場が設けられた。

(2) 外国人信徒大会

2012年6月には、仙台教区の主催で福島市で、仙台教区第一回外国人信徒大会が開催され、被災地を含む東北各地から200人近く

フィリピン人信徒が参加した(フィリピン人以外では中国人、韓国人など)。この大会には首都圏から多数のフィリピン人信徒も参加したが、こうしたイベントを通じて、被災地のフィリピン人とそれ以外の地域のフィリピン人との間での交流の機会が作られるようになった。

(3) 山形県新庄教会の事例

東日本大震災の被災地ではないが、比較のためにカトリック新潟教区の新庄教会を複数回、訪問した。山形県新庄地域では1980年代後半より、主として行政が主導した「お見合い」によりフィリピンから多数の女性たちが、当時の表現を用いれば「農村花嫁」としてやってきた。新庄は東北のなかでも雪深い地域であり、フィリピンから結婚のため来日した女性たちにとっては決して楽な生活環境ではなかった。1980年代には新庄にはカトリック教会は存在しなかった。そこで彼らは新庄市と連絡をとり、ミサに出席したいと申し出た。市の担当者はカトリック教会に連絡し、1980年代末より新庄市内のホテル、集会場、レストランなどで月に1度か2度のミサが行われるようになった。

それ以来、新庄市内では、2010年まで場所を変えてミサが行われ、フィリピンの女性たちが出席していた。そして、2010年10月にはカトリック新潟教区、山形教会、その他の関係者、そしてフィリピン人たちの努力により新庄教会が誕生した。創立当初の教会員の名簿をみると、70名近い教会員のうちの50人近くが成人でそのほとんどがフィリピン人の女性(日本人は数名)であり、残りは国際結婚による子どもたちである。同教会は仙台教区、山形教会、イエズス・マリアの聖心会、オタワ愛徳修道女会などの協力により、ほぼ毎週ミサ(日本語)を行っている。

新庄教会の事例は、日本のカトリック教会におけるフィリピン共同体のありかたを考える上での1つのモデルとなっている。多くのメンバーが来日10数年から20年、なかにはさらに長期間にわたって新庄地域で暮らし、すでに孫を持つ人たちもいるため、みな日本語に堪能であり、ミサは原則として日本語で行うことができる。それでも前述の岩手県A教会の日本語ミサと同様に、まず主の祈りを日本語で唱え、さらにタガログ語でも歌うなどの工夫がなされている。

東日本大震災があった2011年の夏からは新庄教会とA教会とは教会として交流を始め、一方の教会から他方の教会に年に一度、交互に訪問を繰り返している。

以上は若干の事例にすぎないが、東北被災地各地のいくつもの教会で、新たに月に1度はフィリピン人などの司祭を招いて、英語もしくはタガログ語のミサが行われるようになった。震災前には考えられないことであった。

この研究においては、こうした各地での取

り組みや変化を実際にその現場（たとえば、気仙沼教会、大船渡教会、一ノ関教会、石巻教会、南三陸の仮設店舗、水沢教会、八戸塩町教会、弘前教会、小名浜教会、須賀川教会、野田町教会など）でのミサや会合を見学することを通し、さらに関係者との公式、非公式のインタビューを通じて、明らかにすることができた。

(4) シンポジウム

2014年10月18日（土）の午後1時半から5時半まで、上智大学において Faces of Being Church among Migrant Filipinos in Japan（「日本におけるフィリピンからの移住者とカトリック教会」）をテーマに、カトリック東京国際センター（CTIC）の協力を得て、シンポジウムを開催した（使用言語は英語）。

シンポジウムの冒頭では、CTICに所属するフィリピン人神父で、移民の神学の専門家でもあるエドウィン・コロス氏（スカラプリニ宣教会）が世界各地におけるフィリピン人海外移住者と在地のカトリック教会との関わりについて講演し、つづいて岩手県大船渡教会、山形県新庄教会、千葉県五井教会の各フィリピン人共同体の信徒がそれぞれの状況について報告した。シンポジウム後半では、東北被災地の外国籍信徒のケアにかかわっているフィリピン人神父、東京教区で20年以上にわたりフィリピン人共同体形成にかかわってきたフィリピン人女性（東京大学教員）、イタリアにおけるフィリピン人移民社会を研究している日本人人類学研究者（広島大学教員）によるコメントにつづいて、参加者全体（90名）で日本におけるフィリピン人とカトリック教会について議論を重ねた。

本シンポジウムは、東日本大震災を契機として、各地の教会に結集しつつあるフィリピン人の活動とそれらのネットワーク化がもたらす意味を比較検証することを目的に開催された。東北の事例については、フィリピンの間でもほとんど知られておらず、その点でも意味があった。

また、日本における海外からの移住者、多文化社会の研究については、すでに一般論ではなく、個別のテーマを中心に議論、検討する段階に入っていることも確認された。在日フィリピン人に関する優れた研究はあるが、彼らとカトリック教会との関係を論じた研究はほとんど類例がなく、このシンポジウムを開催することには大きな意義があった。

(5) 今後の方向

1970年代後半よりフィリピンから海外移住労働者が来日、80年代以後は日本人男性と結婚して、日本で家庭を持つ女性たちが増えた。現在、日本における外国人長期在留者は200万人を数えるが、そのうちフィリピン人は20万人強で、国別では中国、韓国・北朝鮮について3番目になる。

国際結婚をしたフィリピン人とその家族は日本全国各地に分散しており、その多くがカトリック信徒であることから、国内各地のカトリック教会のミサに出席している（あるいは今後、出席する可能性がある）。地域によって（さいたま教区、東京教区千葉県下の教会など）、ミサ出席者が日本人よりもフィリピン人のほうが多いという事例も報告されている。東北被災地においても、震災後、徐々に各地でフィリピン人信徒が教会に集まるようになり、いくつかの教会では活発な活動を展開するようになった。

日本とフィリピンとの間にはカトリシズム実践、信仰表現の違いなどが見られるが、カトリックであるフィリピン人共同体と日本人共同体の良好な関係を築くことが今後の課題であることが確認された。また、高齢化、少子化の影響下にある日本人信徒総数は最大でも50万人であり、それに対して在日フィリピン人、ブラジル人、ペルー人、加えて人数は少ないが、韓国人、中国人、ベトナム人などのカトリック信徒総数は50万人（推計）近くになる。日本のカトリック教会が近年直面しているこのような新しい状況下で、「日本人の教会」から「日本の教会」に転換することが求められている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

寺田勇文「日本のなかのフィリピン人：3.11後のコミュニティの状況」『福音と世界』、2013年8月号、17-24。（査読なし）

寺田勇文「東北の被災地からフィリピンの被災地へ」『フィリピン台風被害報告書』(CICS Discussion Paper No. 45)、京都大学地域研究統合情報センター、2013年、58。（査読なし）

寺田勇文「在日フィリピン人被災者支援について」『情報災害』からの復興：地域の専門家は震災にどう対応するか（地域研究コンソーシアム年次集会シンポジウム報告書、JCAS Collaboration Series 4）、2013年、11-13、23-27。（査読なし）

寺田勇文「台風被害がもたらした希望と可能性」『フィリピン台風被害報告書』(CICS Discussion Paper No. 45)、京都大学地域研究統合情報センター、2013年、56-57。（査読なし）

〔学会発表〕(計7件)

TERADA, Takefumi. "Filipinos in Northern Japan after the March 11 Earthquake", 2015年1月26日, Third World Studies Center, University of the Philippines. (フィリピン、ケソン市)

TERADA, Takefumi. "Filipino Community Building in Tohoku after the 3.11 Earthquake". 第19回フィリピン研究会全国フォーラム, 2014年6月19日, 広島

大学。(広島県東広島市)
寺田勇文「東日本大震災とフィリピン人」, 上智大学講演会, 2014年3月28日, 上智大学大阪サテライトキャンパス。(大阪府大阪市)

寺田勇文「台風被害をもたらした希望と可能性」フィリピンの台風被害に関する緊急集会, 2013年12月4日, 京都大学地域研究統合情報センター。(京都市左京区)

TERADA, Takefumi, "Finding Home Away from Home: Filipinos in Tohoku after the 2011 Earthquake", APU Conference on Revitalization and Development, Ritsumeikan Asia-Pacific University, 2013年11月2日。(大分県別府市)

寺田勇文「在日フィリピン人の世界: 3.11 後の被災地を中心に」, アジア太平洋学への招待, 2013年4月15日, 法政大学国際文化学部。(東京都千代田区)

TERADA, Takefumi, "Filipino Communities in Tokoku after the Disasters of March 11", International Conference on "The 3.11 Disaster of Japan: Vulnerability, Loss and Social Transformation, 2013年1月25日, Ateneo de Manila University。(フィリピン、ケソン市)

〔図書〕(計4件)

TERADA, Takefumi, "The Religious Propaganda Program for Christian Churches", Critical Readings on Christianity in Japan, Mark R. Mullins (ed.), Leiden: Brill, Vol. 2, 2015, 633-668.

寺田勇文, 「キリスト教: 聖体としてのパン」, 南直人(編)『宗教食』, ドメス出版, 2014年, 90-108.

寺田勇文, 「日本のフィリピン人カトリック共同体」, 吉原和男編者代表; 蘭信三ほか編, 丸善出版, 2013年

寺田勇文, 「千葉県内のフィリピン人カトリック共同体」, 房総日本語ボランティアネットワーク(編)『千葉における多文化共生のまちづくり: 広がるネットワークと子どもたちへの支援』, エイデル研究所, 2012年, 38-43.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
寺田 勇文 (TERADA TAKEFUMI)
上智大学・総合グローバル学部・教授
研究者番号: 20150550